詩篇144篇

ダビデによる

Ⅰ．一人称単数の祈り

《詩人を守る神》

1 ほむべきかな。わが岩である主。主は、戦いのために私の手を、いくさのために私の指を、鍛えられる。
2 主は私の恵み、私のとりで。私のやぐら、私を救う方。私の盾、私の身の避け所。私の民を私に服させる方。
3 主よ。人とは何者なのでしょう。あなたがこれを知っておられるとは。人の子とは何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。
4 人はただ息に似て、その日々は過ぎ去る影のようです。

《救いを求める祈り》

5 主よ。あなたの天を押し曲げて降りて来てください。山々に触れて、煙を出させてください。
6 いなずまを放って、彼らを散らし、あなたの矢を放って、彼らをかき乱してください。
7 いと高き所からあなたの御手を伸べ、大水から、また外国人の手から、私を解き放し、救い出してください。
8 彼らの口はうそを言い、その右の手は偽りの右の手です。

《救いの確信》

9 神よ。あなたに、私は新しい歌を歌い、十弦の琴をもってあなたに、ほめ歌を歌います。
10 神は王たちに救いを与え、神のしもべダビデを、悪の剣から解き放されます。
11 私を、外国人の手から解き放し、救い出してください。彼らの口はうそを言い、その右の手は偽りの右の手です。

Ⅱ．一人称複数の祈り

《主を神とする民への祝福》

12 私たちの息子らが、若いときに、よく育った若木のようになりますように。私たちの娘らが、宮殿の建物にふさわしく刻まれた隅の柱のようになりますように。
13 私たちの倉は満ち、あらゆる産物を備えますように。私たちの羊の群れは、私たちの野原で、幾千幾万となりますように。
14 私たちの牛が子牛を産み、死ぬこともなく、出て行くこともなく、また、哀れな叫び声が私たちの町にありませんように。
15 幸いなことよ。このようになる民は。幸いなことよ。主をおのれの神とするその民は。

第七のダビデ詩篇です。本篇の特徴は、前半（１～11節）では個人的な祈りとして「**私**」が用いられ、後半（12～15節）では民族的な祈りとして「**私たち**」が用いられている点です。内容的には、前半は敵対者との霊的な戦い、後半は民の祝福が語られていて、対照をなしています。特に前半は18篇で語られてい

た内容と重複するところが多く、18篇のタイトルが「**指揮者のために。主のしもべダビデによる。主が、彼のすべての敵の手、特にサウルの手から彼を救い出された日に、この歌のことばを主に歌った**」となっていることから、背景的出来事は類似しているのでしょう。

他篇の関連箇所と比較しつつ本篇の中身を見てまいりましょう。

主は、戦いのために私の手を、いくさのために私の指を、鍛えられる。（144:1）

戦いのために私の手を鍛え、私の腕を青銅の弓をも引けるようにされる。（18:34）

主は私の恵み、私のとりで。私のやぐら、私を救う方。私の盾、私の身の避け所。私の民を私に服させる方。（144:2）

主はわが巌、わがとりで、わが救い主、身を避けるわが岩、わが神。わが盾、わが救いの角、わがやぐら。（18:2）

まるで戦線に臨むかのような勇ましい描写。何らかの戦いのために武器を整え、心を武装しています。１節では神を「**岩**」とも呼んでいますが、これは神に信頼する者を守る神の力を表します。２節の多くの表現は、鉄壁の防御としての神を表しているのです。

主よ。人とは何者なのでしょう。あなたがこれを知っておられるとは。人の子とは何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。（144:3）

人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。（8:4）

144篇は、B.C.586年にバビロニアによってエルサレムが陥落させられたことを背景として書かれた詩だと言われます。つまり、８篇でダビデが自分を個人的に知っておられる神を覚えていることになぞらえ、祖国を失いアイデンティティを喪失したかのような自分をもお忘れにならない神を呼び求めているのでしょう。

人はただ息に似て、その日々は過ぎ去る影のようです。（144:4）

いったい、生きていて死を見ない者はだれでしょう。（89:48）

詩人は自分という存在のはかなさを知り、そのような者にさえ目を留めておられる神に依り頼みます。

主よ。あなたの天を押し曲げて降りて来てください。山々に触れて、煙を出させてください。（144:5）

主は、天を押し曲げて降りて来られた。暗やみをその足の下にして。（18:9）

いなずまを放って、彼らを散らし、あなたの矢を放って、彼らをかき乱してください。（144:6）

主は、矢を放って彼らを散らし、すさまじいいなずまで彼らをかき乱された。（18:14）

いと高き所からあなたの御手を伸べ、大水から、また外国人の手から、私を解き放し、救い出してください。（144:7）

主は、いと高き所から御手を伸べて私を捕らえ、私を大水から引き上げられた。（18:16）

ここに「**外国人**」という表現が出てくるところから、イスラエル民族が異国へ連れ去られ強制労働に従事させられている状況から救い出してくださることを求める祈りがイメージされます。まるで神が天に帰ってしまって民を顧みなくなってしまわれたかのような苦しみ。「**天**」が鉄板のように固く閉ざされているようにさえ感じる。その天を「**押し曲げて**」降りて来ていただきたいと。

神よ。あなたに、私は新しい歌を歌い、十弦の琴をもってあなたに、ほめ歌を歌います。（144:9）

十弦の琴をもって、ほめ歌を歌え。新しい歌を主に向かって歌え。（33:2b-3a）

神の救いが実現した暁には「**新しい歌**」を歌うと誓います。賛美は常に「新しさ」が求められています。新曲が作られるだけでなく、伝統的な賛美歌にも新鮮さを込めることができます。それは、歌う人の信仰によってもたらされるものです。

かつて神が「**しもべダビデ**」（10節）を多くの危険から救い出されたことが想起されています。捕囚という憂き目に遭っている詩人は「**外国人の手から解放し、救い出してください**」（11節）と切に求めています。

ここまで詩人は「**私**」「**私**」と個人的な思いを主に訴えてきましたが、後半では「**私たち**」に置き換えて民全体が祝福されることを求めます。捕囚から解放された日に民が回復していくことを夢見ているのでしょう。子孫について、「**よく育った若木**」「**宮殿の建物にふさわしく刻まれた隅の柱**」（12節）という表現が使われていますが、ここには健康かつ堅牢なイメージがあります。「**倉は満ち**」「**あらゆる産物を備え**」「**羊の群れは…幾千幾万**」（13節）と、人口が取り戻されていくことが願われている。歴史的に、ユダヤ人の虐殺により何百万人もの人々が短期間に姿を消していった出来事がありましたが、そのようなことが起こる度に歌われてきた詩篇ではないでしょうか。

14節の「**子牛を産み**」（מְסִבָּלִים／メスッバーリーム）という語をどう訳すべきかが難しい課題であり、この語の語幹（סָבַל／サーバル）が「産む」「積まれる」「自分を重荷にする」などを意味することから、いくつかの訳の可能性が提案されています。おそらく、13節からの流れで捉えていくと、多くの子孫が与えられ流産などからも守られていくことが願われているのでしょう。

「**主をおのれの神とするその民**」（15節）ということばが最後に出てきます。神への背信は常に民に災いをもたらしてきました。全き信仰に立つ民が形成され、曲がったところのない生き方を続けていくとき、必然的に上記のような祝福が及ぶのでしょう。このことは、永遠の神の国において、もはや罪とは無縁になった世界に生きる人々の姿を先取りしているようです。キリストを信じる人々がやがて見るべき世界が描かれていると読むこともできるでしょう。